

⑱ 街道別俳諧摺

五 畿 内

行列の来ぬ町かなし江戸の春  
 盤たらいにも寺の名見へて花の宿  
 聞きて寐ねた雨は乾ぬきてけさの霜  
 山見へて花に通ふや朝あこ、ろ  
 里はまた寐ねて居る畑はたけの霞かすみかな  
 蝶ちようひとつ見かけて遠とほき渚なぎさかな  
 夜曇よりは田にも葉かほと、ぎす  
 今出来し川の中洲や揚雲雀  
 春一度着たは別わかなり更衣えんぎ  
 踏ふこ、ろ椿と知りぬ闇やみまされ  
 雨にあく気も引たつる新茶あたら哉  
 うこきやむ瓜うりの二葉や啼蛙なきか  
 初秋の朝日さしけり庭の松  
 春雨や夜更よて晴はて笑わひ声  
 水見れば心うつすや秋の月  
 月に行向ふ明りや雲一重  
 はつ秋や日頃見る田の朝あらし  
 とりわけてゆかしふ家の冬かまへ  
 負おひ行や風に追はる、落葉おち籠かご  
 人近ちかう舞戻りけり秋の蝶ちよう  
 二三羽で来ぬ後ゆかし月の鴈かり  
 東 海 道  
 呵あつても子のほしかるや木瓜ぼけの花  
 居いこほれて井堰せきになくや夕千鳥  
 うくひすの退ひてしつみぬ竹柄杓ひしやく  
 赤合あか羽着てたつ袖そでに散る椿  
 蓬菜ほうさいにと、いて佗わし行燈あんどんの火  
 山里の寒さもなかし赤椿  
 白しろけしや仰向く鶏けいの顔かほにちる  
 昼中の月は動かす鳴雲雀  
 良暮らふて畑はたけから出たり春の月  
 くる、いろもちし水田や帰る鴈かり  
 宵月や花の往來ゆきまになりすまし  
 下池の芦あしまた青あしちる紅葉  
 街道へこほれか、りぬ柳影

芹 舍  
 梅 通  
 黙 池  
 淡 節  
 公 成  
 赤 甫  
 文 海  
 祭 魚  
 松 郎  
 鴈 舟  
 鳥 岳  
 有 節  
 此 松  
 昇 左  
 松 隣  
 稿 處  
 拳 一  
 公 眠  
 知 風  
 月 人  
 素 屋  
 養 瓜  
 雀 叟  
 五 鈴  
 而 后  
 一 清  
 李 曠  
 醉 雨  
 我 竟  
 三 楓  
 指 石  
 僚 山  
 士 前  
 梅 裡

春もまた梅にのみたつ日数かな  
 田処かたや蔭かげもとめす鳴水なみづ鶏  
 書初しよやけさは塵じんさへうつくしき  
 連翹れんぎようやよりそふ蝶ちようもおなし色  
 むつましや葎むらの宿も梅の花  
 二三日たなひきつめし霞かすみかな  
 かきりある年と思はず明の春  
 柴しばの戸かどや燈あかりにもみる春の風  
 家みえて香かほのあり何処どこも梅柳  
 代かゆる鳥や余寒の隅田川  
 青柳や明はなれ行丘の家  
 初空や野山にわたる大けしき  
 昼はみな寐ねるにもあらぬ蛙かむずかな  
 あるほとの水は氷りし川辺かわ哉  
 思ふこと言ぬそふりや春の月  
 木のもととはまた明ぬのに春の鳥  
 春の野や明行雲の根につく  
 をかしみもかなしみもあり鶉うずの贄にえ  
 柴棚しばを崩したあとや草の萌も  
 子の日野や引すにほしき一処ひとところ  
 つむ日まで野は寒かりし薺なずなかな  
 啼なかけてそらしつみする蛙かむず哉  
 ひらかねは知れぬ物添ふ初荷はつなかな  
 初雪をことしの曠あひらや草畑  
 いねつむも去年こぞを忘る、ひとつかな  
 花守にいねと語る、夕ゆふへかな  
 桔槔かたがわとりつける木も若葉わか哉  
 人の身みにからまる春の寒かな  
 うくひすや氷こおりを走る声こゑの先  
 春の月寐ね酒さけふた、ひ汲くみにけり  
 はなひらもまた見ぬ梅の匂かほひ哉  
 運うふ間も去年こぞとことしや鶴つるの足  
 蝶ちようの来て野のこ、ろうつる坐敷ざしきかな  
 東 山 道  
 初市はついちや小路こうぢにまたすから車  
 挿花さかに見る元日げんじつの雫しずくかな  
 釣竿つりざおを持もて萩見はぎみの案内案内哉  
 朝風あさかぜにふりこほす駒鳥こまの高音たかね哉

蓬 宇  
 完 伍  
 鳥 谷  
 杜 水  
 布 丈  
 西 馬  
 抱 義  
 祖 郷  
 得 蕪  
 見 外  
 尋 香  
 魯 心  
 芳 草  
 一 夢  
 香 以  
 靖 路  
 田 麓  
 巴 雪  
 山 子  
 四 端  
 五 休  
 松 頂  
 吳 城  
 花 海  
 三 支 雄  
 白 亥  
 為 山  
 逸 瀨  
 梅 笠  
 寄 三  
 天 由  
 月 杵  
 李 郷 女  
 帆 道  
 心 足  
 半 湖  
 琴 堂